

第七十五回 卒業証書授与式 式辞

暖かい春の陽差しが輝く季節がめぐってまいりました。本日、保護者の皆様のご臨席を賜り、福山市立芦田中学校第七十五回卒業証書授与式を挙行できますことに、心から感謝し、厚くお礼申し上げます。なお、今年度も、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、卒業生、保護者、教職員の参加で行わせていただきますことを、ご了承くださいます。

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。『卒業証書』を手にした今の気持ちはいかがですか。中学校生活での様々な場面が、そのときそのときに出会った人たちの表情とともに浮かんでくるのではないのでしょうか。友だちの顔、先生方の顔。笑った顔、怒った顔。うれしかったときの顔、けんかしたときの顔、一生懸命に取り組んでいたときの顔。あいさつを交わした地域の方々の顔、見守られていると感じた温かな笑顔。修学旅行先で出会った人たちの顔。考えてみれば、私たちは、本当にたくさんの人と、そして多くの表情と、できごとや時間を共にし、つながりをもってきました。

そのつながりをつくってきた中学校生活ですが、新型コロナウイルス感染症拡大により、皆さんが一年生の終わりのときから二年以上の月日が、様々な制約を受けたものとなりました。その都度、自分自身の行動と判断、工夫、そして人との距離を取ることを求められました。しかし、こうした状況だったからこそ、心と心のつながりの大切さが身に染みだした中学校生活になったのではないのでしょうか。

皆さんが、最高学年となった年は、東京オリンピック・東京パラリンピック、北京オリンピック・北京パラリンピックが開催され、多くの日本選手が活躍し、数々の熱いメッセージが発信されました。

《もっと高みを目指したい。》体操の個人総合で金メダルを獲得したのは橋本大輝選手です。

「五年前、自分はオリンピックに出場できると思っていませんでした。夢が現実になって、金メダルを獲得できました。これからはディフェンディングチャンピオンとしてやっていかなければいけないので、変わらない努力で毎日やっていきたいです。今の状態に満足せずにもっと高みを目指していきたいです。」

《あきらめなければ夢はかなう。》十三年ぶりに復活したソフトボールで、金メダルを獲得したときのピッチャーが上野由岐子選手です。

「十三年という年月を経て、最後まであきらめなければ夢はかなう、ということをとくさんの方々に伝えられたと思います。ソフトボールはまた次回の大会からなくなってしまいますが、あきらめることなく前に進んでいきたいと思えます。」

《自分のすべてを出しきることができた。》スピードスケート千メートルで金メダルを、五百メートル、千五百メートル、団体追い抜きで銀メダルを獲得したのは高木美帆選手です。

「このオリンピックの出だしはつらいことがたくさんありました。最後に自分の全てを出しきることができて、たとえ金メダルを取れなくても悔いはないと思えるレースができました。」

《自分のプライドを詰め込んだ。》オリンピック三連覇とはなりませんでしたが、フィギュアスケートフリーで前人未到の四回転半が世界初認定されたのは羽生結弦選手です。

「挑戦しきった、自分のプライドを詰め込んだオリンピックだったと思います。」

《やり遂げることはできた。》前回平昌オリンピックではスピードスケート五百メートルで金メダル、千メートルで銀メダルを獲得した小平奈緒選手は、五百メートル十七位、千メートル十位でした。

「最後、成し遂げることはできなかつたけれど、しっかりと自分なりにやり遂げることはできたのかなと思っています。」

オリンピックでの選手の活躍から、選手に会ったことのない私も、元氣と感動を与えられました。皆さんが将来活躍する場所はオリンピックという場所ではないかもしれませんが、一人一人が身に付けた力を生かして活躍する姿は、周りにいる人に誇りや元氣、喜びを与えることになるはずですよ。

どうか、今の自分の力に満足することなく、もっと大きな自分になり、更に多くの人を笑顔にする自分になる、という強い志をもって人生を進んでください。志とは、心の中にもっている目標や信念です。志ある人は、たくさんの人に応援してもらえます。皆さんが、強い志をもっている間は、皆さんの成長は止まることはありません。皆さんが今まで以上に成長すればするほど、皆さんにつながる多くの人たちが幸せになり、笑顔になるのです。

私は皆さんの更なる成長と笑顔あふれる人が増えていくことが、とても楽しみです。終わりにになりましたが、きょうまで温かい愛情を注ぎ育ててこられ、この日を久しく待ち望んでおられた保護者の皆様の喜びは、一入（ひとしお）のものがおありかと拝察いたします。心からお祝いを申し上げます。また、本校教育に深いご理解とご支援、ご協力を賜りましたことに厚くお礼申し上げますとともに、感謝いたします。

今こそ別れめ。

卒業生の皆さんに幸あれと祈りながら、式辞といたします。

二〇二二年（令和四年）三月十二日

